

令和元年6月6日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01745

研究課題名（和文）「他者とつながる」力を育む幼児教育実践と就学後の「間主観的知性」との関連

研究課題名（英文）Role of preschool education in fostering the ability of connecting with others in relation to the intelligence of intersubjectivity in an elementary school.

研究代表者

川端 美穂 (KAWABATA, miho)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00399221

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「他者とつながる」経験を支える幼児教育・保育実践のあり方を明らかにし、その効果を就学後の間主観的知性との関わりで検討することを目的とした。集団保育施設及び小学校での観察から、保育者による支えと仲間との関係性の蓄積があり、文脈・状況を共有する幼児期の集団は、情動的共鳴が起こりやすいこと、幼児は共同体内の重層的なネットワークのやりとりを通じて、仲間の態度や反応の意味を感じとるように方向づけられていることがみえてきた。さらに、共にある活動のなかで「わたしたち、みんなの」情動経験を共有している子どもは、対人的な安全感を持ち、就学後に他者と協働することに肯定的な構えを持つことも示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児が「他者とつながる」こと、つまり他者と「通じ合う」感じを持つことについては、これまで他者視点取得やソーシャルスキルといった対人関係能力に関わる個人要因、あるいは孤立を生み出しやすい環境要因から論じられてきたが、近年、関係論的な分析の重要性が指摘されている。本研究では、「他者とつながる」経験を、相手とともに創り出しているプロセスと捉えて、その過程で重要となる要因を質的に分析した。幼児期から児童期をまたぐ観察事例によって、「他者とつながる」力を育成する保育実践の実際を可視化し、「他者とつながる」経験が就学後の集団活動場面の参加過程にどのようにつながるのかについて具体的なデータを示した。

研究成果の概要（英文）：This research aims at clarifying specific mechanisms of early childhood education supporting the competency of connecting with others, and examining their impact on intersubjective intelligence in elementary schooling. The observation at preschool facilities and elementary schools revealed the following. First of all, in the early childhood peer group, there is accumulation of the support by the teachers and the relationship with peers. And the group sharing the context was found to be susceptible to emotional resonance. It seemed that children are oriented toward sensing the meaning of their own and peers' reactions through a multilayered network of exchanges. Furthermore, it was also suggested that the early childhood experience of responding to the peers' emotions in activities undertaken together is associated with children's tendency to feel a sense of security and positively grasp possibilities of their own and of others in the group activity setting of an elementary school.

研究分野：発達心理学

キーワード：幼児教育・保育実践 他者とのつながり 共同体 情動的共鳴 間身体性 間主観的知性 参加の構え 対人的安全感

4. 研究成果

(1) 附属幼稚園 A と市立認定こども園の、いずれのフィールドにおいても、行事に向かう相互作用のなかで、保育者が個々の幼児の情動調整をしながら幼児の参加状態を改善しようとする“お膳立て”の試みがみられた。また、そのような保育者の支えのもとで、幼児が「十全の参加者」になっていくとき、一部の参加者の情動が参加者みんなのものとして表出されることがあった。それは、ある幼児と他者の間で同一化 (identification) が与件となって情動模倣がそれぞれ生じたというような二者間の過程に終始するものではなく、それまでの経験の蓄積のなかで“わたしたち、みんなの”情動にตอบสนองしていく枠組みが共同体のなかで構成されつづけると仮定された。そして、幼児期に共同体の「共にする、共にある」活動をとおして、繰り返し“わたしたち、みんなの”情動経験を共有している子どもは、そのような経験の乏しい子どもに比べて、対人的な安全感を持ち、就学後に他者と協働することに肯定的な構えを持つことも示された。

本研究で収集した事例からは、保育者による支えと仲間との関係性の蓄積があり、文脈・状況を共有する幼児期の集団は、情動的共鳴が起こりやすいこと、幼児は共同体内の重層的なネットワークのやりとりを通じて、個々の心的状態を特定するというより、その状況全体として仲間の態度や反応の意味を感じとるように方向づけられていることがみえてきた。さらに、共にある活動のなかで“みんなの”情動にตอบสนองし合うような幼児期の経験は、就学後の集団活動の場面で自他の可能性を肯定的に捉える傾向と関連することも示唆された。

(2) 当初の計画通り、定期的に各フィールド園で収集した事例に関するカンファレンスを開催して解釈の妥当性を複数の視点から検討したが、このことは個々の保育者の省察や実践知の共有のきっかけとなる対話の場づくりにもなった。さらに、フィールド内にとどまらず、札幌国際大学心理相談研究所公開講座の「保育と心理臨床合同セミナー」として、本研究フィールドの事例を題材とするセミナーを開催することができた。研究期間中(2015年度から2018年度)、計4回にわたり開催したセミナーでは、各回80名前後の保育者・教師・研究者・養育者・福祉関係者らがそれぞれの現場の子どもも理解や発達援助のあり方について議論し、自らの教育課題について語り合い、相互理解を深められたことで、参加者の「他者とつながる」力のエンパワメントができたことも成果の一つといえる。

〈引用文献〉

- ① Rogoff, B. (2006). 文化的営みとしての発達—個人、世代、コミュニティ(當眞千賀子, 訳) 東京: 新曜社. (Rogoff, B. (2003). *The Cultural Nature of Human Development*. Oxford University Press.)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 川端美穂(2019). 保育現場において幼児が「遊び込む」状況をどうつくるか—子どもと保育者が共に遊びを構造化するために—. 北海道教育大学附属旭川幼稚園研究紀要, 査読無, 57-61.
- ② 川端美穂(2018). 集団保育場面における幼児の生活経験の質とは何か—教師が子どもの遊びを「援助する」ということの意味—. 北海道教育大学附属旭川幼稚園研究紀要, 査読無, 62-68.
- ③ 木村彰子・川端美穂(2018). 入園という環境移行を幼児はどのように経験しているのか—アスペルガー幼児が傍観者から参加者になるプロセスをとおして—. 札幌国際大学紀要, 査読無, 第49号, 19-26.

〔学会発表〕(計16件)

- ① Yumi Tamase, Miho Kawabata, Sayaka Nakanishi, Akiko Kimura and Hitomi Nii(2019). Consciousness change among novice teachers in personnel exchanges between kindergarten and elementary schools. The Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) 20th Annual Conference (TAIPEI, TAIWAN, PAPER: 31).
- ② 川端美穂・中西さやか・玉瀬由美・木村彰子(2019). 保育者が保育のエピソードを綴る過程—TEA(複線経路等至性アプローチ)による描出と考察—. 日本保育学会第72回大会(大妻女子大学)
- ③ 川端美穂・榊原久直[企画], 大倉得史・友田明美[話題提供], 佐伯胖[指定討論](2019). 国内研究交流委員会企画シンポジウム「間主観的, 間身体的かかわり合いの中で発達する『心』」. 日本発達心理学会第30回大会(早稲田大学)
- ④ 川端美穂(2018). 幼児期の保育のなかにみられる心の理解—情動共有体験のなかで感じ取る「心」と内省的に気づく「心」. 大会シンポジウム(中野茂[企画], 中野茂・川端美穂・小島康次[話題提供], 戸田まり[指定討論]) 北海道心理学会第65回大会(札幌国際大学)
- ⑤ 川端美穂・木村彰子(2018). 保育現場におけるメンタリングのあり方(4)—一人称的・二人称的・三人称的かかわりの違いに注目して—. 日本保育学会第71回大会(宮城学院女子大学)
- ⑥ 木村彰子・川端美穂(2018). 保育現場におけるメンタリングのあり方(3)—メンティとメ

ンターの二者関係を支える「場」の同僚性一。日本保育学会第71回大会(宮城学院女子大学)

- ⑦木村彰子・川端美穂(2018)。「他者とつながる」力を育む保育(6)ー同伴的 THEY に誘われて雪山との YOU 的対話を深める一。日本発達心理学会 第29回大会(東北大学)
- ⑧川端美穂・木村彰子(2018)。「他者とつながる」力を育む保育(5)ー「善さ」に向かう自分をつくる、仲間をつくる一。日本発達心理学会 第29回大会(東北大学)
- ⑨川端美穂・木村彰子(2017)。保育現場におけるメンタリングのあり方(2)ー初任者の可能性を引き出す発達支援関係一。日本保育学会第70回大会(川崎医療福祉大学)
- ⑩木村彰子・川端美穂(2017)。保育現場におけるメンタリングのあり方ー実習生の可能性を引き出す発達支援関係一。日本保育学会第70回大会(川崎医療福祉大学)
- ⑪木村彰子・川端美穂(2017)。「他者とつながる」力を育む保育(4)ー「二人称的かかわり」への糸口一。日本発達心理学会第28回大会(広島大学)
- ⑫川端美穂・木村彰子(2017)。「他者とつながる」力を育む保育(3)ー二者関係の敏感性と集団的敏感性一。日本発達心理学会第28回大会(広島大学)
- ⑬木村彰子・川端美穂(2016)。保育現場の記述における書き手と読み手の関係性(2)。日本保育学会第69回大会(東京学芸大学・白梅学園大学)
- ⑭木村彰子・川端美穂(2016)。保育現場の記述における書き手と読み手の関係性(1)。日本保育学会第69回大会(東京学芸大学・白梅学園大学)
- ⑮木村彰子・川端美穂(2016)。「他者とつながる」力を育む保育(2)。日本発達心理学会第27回大会(北海道大学)
- ⑯川端美穂・木村彰子(2016)。「他者とつながる」力を育む保育(1)。日本発達心理学会第27回大会(北海道大学)

[図書] (計1件)

- ①川端美穂(2018)。ことばの発達と人とのかかわり。藪中征代・玉瀬友美・星野美穂子(編) 新版 保育内容・言葉ー乳幼児の言葉を育むー(分担執筆)。教育出版, 60-70, 総頁208.

[その他]

報告書等

- ①二井仁美・川端美穂編著(2019)。大学という地域資源を活かした「チーム学校」のあり方ー北海道教育大学附属旭川幼稚園における取り組み一。北海道教育大学附属旭川幼稚園, 総頁50.
- ②榊原久直・川端美穂(2019)。第30回大会国内研究交流委員会企画シンポジウム報告。日本発達心理学会ニューズレター, 第87号, 17-18.
- ③川端美穂(2017)。幼児の「体験」をどう捉えるか。北海道教育大学教育学部附属旭川幼稚園研究紀要, 61-62.
- ④川端美穂(2016)。幼児の内面と葛藤をめぐる保育者の内面と葛藤、その先にある「省察」。北海道教育大学教育学部附属旭川幼稚園研究紀要, 97-99.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 木村 彰子

ローマ字氏名: KIMURA, akiko

所属研究機関名: 札幌国際大学

部局名: 人文学部心理学科

職名: 准教授

研究者番号: 70713139

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。